むかし「局アナ」いま「隠居」

# 手造り ギター その後

上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住

■京都大学農学部林学科卒業
■元朝日放送アナウンサー
■元池田マルチメディア代表取締役
■講演、朗読指導など以外は隠居中


前回は、戦後の徳島県立高校生が作った スチールギターの話をしましたが、その後のスチールの末路と、私たちメンバーの行く末について、もうちょっと話を続けてみます。

私たちが高校二年のとき、**敏さん**という生徒が拵えたスチールギターは、卒業後、私の家で燻(くすぶ)っていました。

なぜなら、私達バンドの皆さんは徳島県**外**の学校に進学したので、浪人を余儀なくされた私だけが徳島に残ってしまったからです。

＊

「なっちゃんの写真館」が、近所にあって、跡取り息子一朗君が同級生でした。

彼は私たちのハワイアンバンドが気に入ったらしく、私にウクレレとスチールの手解(てほど)きを 頼んできたので、指南したことがあるのです。

その彼が東京写真学校に進学するや、音楽的 才能が花開き、師匠の私を超えてしまいました。

夏休みに 帰省した彼は超高価な ピックギターで、ジャズをソロで弾いてみせ、「ハワイアン、やりたいけん、スチールギター、貸してよ」と言うのです。

結構な話じゃないですか。スチールが蘇(よみがえ)るのです。

私は喜んで進呈しました。

このスチールで一朗君は、「アロハ スターズ」というハワイアンバンドを作って活動していましたが、私と同じ「音符の読めない世代」ですから、一朗君の演奏は全部「**ハ**調」だったそうです。

＊

家業の写真館を継ごうとしない一朗君に困り果てた母親（＝なっちゃん）は、彼がずっと欲しがっていた**バイブ**(ヴィブラフォン)をポンと買い与えて曰く、「写真館を経営する傍ら、音楽をやればいいでしょ」

そのバイブたるや、当時、大学卒 初任給の10数倍!!

19歳の心を掴むに充分な条件でした。

これにて手製スチールは御用済となり 行方不明。

一方、写真館を相続した一朗君は家業と音楽を両立させていましたが、59歳の若さで病死しています。

私たち 高校生が作ったスチールギターで**キュ〜ン**というハワイのサウンドを徳島の街に初めて轟かせた由緒あるハワイアンバンド、「ナレオアイランダーズ」の顔ぶれは、当初 四人でした。

そこへM君が割り込んできたのです。

その割り込み方が強引というか、ケッタイというか、何しろ変わったお人でした。

ある日、四人で 機嫌よく音合わせをしている最中にギターを抱えたM君が現れ、物も言わずニコリともせず誰とも目を合わすことなく、ギターの伴奏を始めるではありませんか。

驚吃して顔を見合わせる四人を尻目に、当人は弾き続けます。

コードは間違いませんが、乱暴な弾き方でした。

(何も言わんと押しかけて来よったけんど、仲間入りするんなら 何とか言えよ)

(やたらガンガン弾くのう)

(四拍子はともかく、ワルツ、ルンバは教えなアカンぞ)

皆さん、腹の中で思っていても…ちょっと追い出すわけにもねえ…。

もともと彼は、私たちの親しい友達ではありませんでした。

同じ学年ですから、顔や名前は知っていましたが、話したことも遊んだことも机を並べたこともなかったと思います。

学制改革が 強行された直後で、私たち四人は旧制徳島中学から 新制の城南高校に割り振られましたが、M君は 別の中学から来た生徒でした。

そんなことで、私たちに話しかけるのが 気詰まりだったのかも知れません。

でも、それならそれで、割り込み方もあるでしょう。

次の練習日も現れました。

ウンともスンとも言わずやって来て、ジャカジャカ勝手に伴奏する…。

（図太い神経しとるなあ）
（こんな無神経な世渡りもあるんじゃのう）
と 思いながらも、優しいメンバーは我慢して、毎回一緒に練習していました。
M君の弾き方に 注文をつけると、嬉しそうに修正して誠意を示します。
結局、メンバーとして、文化祭の舞台で 演奏した次第ですが、殆んど言葉を交わすこともなく、文化祭終了と同時に、縁が切れてしまいました。
何を考えているか解らん人物でしたが、東京の有名私立大学に入ったその年に、十和田湖で 年上の女性と心中しています。
一九五二年(昭27)のこと、大きく報道されました。

＊

ウクレレ担当の H君も、長生きしてはいません。
偉い医学者だった父親が、敗戦後、大陸で抑留されたことから留守家族は徳島の母親の実家で暮らしていました。
小柄ながら男前のH君は高校のときから かなりの**ワル**で、手籠めにした女も何人かいましたし、腕には覚醒剤の注射痕がしこりになって、夏も半袖シャツが着られません。
彼の告白だと、覚醒剤が効いてくると、狂暴になるのだそうです。
石をハンカチにくるんで夜更けの街に出没しては、通行人を殴って逃げる。
もう 無茶苦茶ですわ。
当時は、薬局で 覚醒剤の錠剤を「ヒロポン」という商品名で売っていました。
深夜の勉強や徹夜麻雀をする人とか夜中に頑張る人、例えばバンドマンや水商売関係者…といった人たちが愛用したようです。
でもH君は高校生の身で注射器を持ち歩いていたのですから、かなりの依存症だったのでしょう。
H君は私立の医大を出て外科医院を開業しました。
お父さんが出資したのか金持ちの娘と結婚したのか、30台で北九州の国道3号線沿いに 大きな病院を建て、交通事故の救急病院として繁盛していたようです。
一九六七年、原子力空母「エンタープライズ 佐世保寄港 反対闘争」の取材で、長期出張したとき、H君の病院の前を車で通りました。
屋上の「H外科医院」なる広告塔を見たとき、感無量というより、不思議な気分でしたねえ。
まもなく彼は診療報酬の不正請求で御用と相成り、「医業停止処分」を受けて暫く逼塞していたのですが、今度は埼玉の浦和で**脳**神経外科を開業しました。
「**脳**の中に巣食う[女癖]を自分で摘出したらどうや」
仲間と悪い冗談を言っていましたが、何しろ男前で医者で金は離れがいいので、女性の被害は絶えることがありません。
様々な犯罪的 武勇伝や不義理の数々を耳にしたのですが、還暦同窓会の席で、「H君は病のため再起不能」という噂を聞いて程なく、訃報に接しました。
早い死は「医者の不養生」というより「医者の不行状」と言ったほうが、適切ではなかったでしょうか。
スチールの敏さんは熊本電波学校に進学し、マグロ漁船の通信士を八年勤めて陸に上がり、電気の知識と技術を生かして尼崎市内で、独立を果たしています。
パソコンは得意中の得意、今もときどき教えに行っていると言っていました。

＊

コントラバスを自己流の一夜漬けで 弾いてくれた**市**ちゃんはエエトコの子ォだったのですが、幼くして父親を失い、厳しい環境を歩んだようです。
東京の名門私大に進んで早々、座り込み闘争に参加していたとき 警棒で頭をカチ割られて重傷を負い、オデコに大きな「向う傷」を残しました。
勤めた会社が同族経営で苦労も多く、働き盛りの中、母親が寝たきりになるなどご難続きでしたが、何とかサラリーマンを勤め上げて、今は 奥さんの故郷である福岡市の高層マンションで、博多湾の眺めを のんびり楽しむ…という、穏やかな日々を過ごしています。
蛇足乍ら、クリスマスのダンスパーティーで私達がハワイアンを演奏したとき、高校生のくせに 女連れでチークダンスを見せつけたP君とN君のその後ですが、

P君は 某政治家の御落胤だとかで映画館の支配人になっていましたが、なぜか鳴門と淡路を結ぶ鉄橋から身投げしたそうです。
N君は 高校を出て直ぐ、ウチの近所で「M」という遊郭を経営していました。
徳島中学の同窓会のあと、酒の勢いで「M」に登楼してお世話になったヤツ二名を、私は知っています。
炭鉱不況の頃、親が娘を売るので、契約に行く彼と阿摂航路の夜行で出逢い、語り明かしたこともあったN君でしたが、二十歳台の若さで病死しました。